

令和7年度病害虫発生予察指導情報  
対象病害虫：イネ・イネカメムシ (No. 3)  
～令和8年度のイネカメムシ防除対策について～

令和8年3月10日  
鳥取県病害虫防除所

## 1 情報の内容

- (1) 令和6～7年の防除実施により、本年度の発生確認地区は前年より減少したものの、前年と同様に県内の広域でイネカメムシが確認されている。また、本年度のイネカメムシによる被害は令和6年度より減少したと推察されるものの、多発ほ場や集中飛来ほ場は県内各地に点在しており、令和8年度もイネカメムシの防除対策が必要な状況である。
- (2) イネカメムシの被害防止及び発生量を増やさないため、下記を参考に本種の防除対策を徹底する。
  - ア 令和7年度と同じく、粉剤、水和剤での防除を基本とする。
  - イ イネカメムシの多発生地域、これまでにイネカメムシが多発した実績がある地域、イネカメムシが多発しやすいほ場では、出穂期～出穂直後（不稔防止）と1回目の防除の7～10日後（斑点米防止）の2回防除を徹底する。
  - ウ その他の地域では、穂揃い期～乳熟初期（斑点米防止）の防除を徹底する。

## 2 令和7年度の発生状況

- (1) イネカメムシの発生確認地点は令和6年に比べて減少したものの、令和7年も県内の広域でイネカメムシが分布していることを確認した。前年と同様に西部地区の発生量が東～中部地区より多い傾向にある。
- (2) 各地区の概況は次のとおりである。
  - ①東～中部地区：多発ほ場や集中飛来ほ場が前年より増加傾向であった。
  - ②西部地区：令和5年の被害発生地域を中心に発生量は減少したものの、依然として多発ほ場や多発地区が確認されている。
- (3) 令和7年12月に実施した越冬調査の結果では、本田でイネカメムシが多発した地域において、日当たりの良い斜面の落葉堆積物下や水田畦畔のジャノヒゲ株内で越冬成虫が確認された。

## 3 令和8年度のイネカメムシ防除対策の方針

イネカメムシの被害防止及び発生量を増やさないため、令和8年度も本種の防除対策を徹底する。農薬による防除効果が高いことから、令和7年度と同様に粉剤、水和剤での防除を基本とする。可能な限り耕種的防除を組み合わせることが望ましい。

### (1) 農薬による防除

イネカメムシの発生状況に応じて1～2回の薬剤散布を行う。最終防除後も発生が多い場合は追加防除を検討する。他の病害虫と同時防除を行う場合は、必要に応じて農薬の混用、又は混合剤を使用する。

#### ア イネカメムシの多発地域、これまでにイネカメムシが多発した実績がある地域、イネカメムシが多発しやすいほ場

- ・イネカメムシの多発地域・多発実績がある地域  
⇒西部（日野郡以外）、東・中部と日野郡でR6～7年に集中飛来を受けたほ場
- ・本種が多発しやすいほ場⇒周辺より出穂が極端に早い、又は遅いほ場

#### (ア) 防除目的

- a 出穂期の吸汁による不稔防止、穂揃い期以降の吸汁による斑点米の防止
- b 地域全体のイネカメムシ発生量の減少

(イ) 防除時期等

防除時期	防除対象のイネカメムシ被害	防除対象の主要病害虫 ※イネカメムシ以外	備考
出穂期～出穂直後	不稔による減収	穂いもち、紋枯病、ウンカ類、チョウ目害虫	穂いもちには適期よりやや遅い散布となる。
1回目防除の7～10日後 ※穂揃い期～乳熟初期	斑点米による品質低下	穂いもち、イネカメムシ以外の斑点米カメムシ類	—

イ 上記以外の地域

(ア) 防除目的

穂揃い期以降の吸汁による斑点米の防止、地域全体のイネカメムシ発生量の増加防止

(イ) 防除時期等

防除時期	防除対象のイネカメムシ被害	防除対象の主要病害虫 ※イネカメムシ以外	備考
穂ばらみ期	—	穂いもち、紋枯病、ウンカ類、チョウ目害虫	従来の出穂前後の基本防除と同じ時期に防除を行う。
穂揃い期～乳熟初期	斑点米による品質低下	穂いもち、イネカメムシ以外の斑点米カメムシ類	

ウ 出穂前（幼形期～穂ばらみ期）にイネカメムシが大量飛来した場合

令和6～7年度と同様に、出穂前に1回目の防除を行い、1回目防除の7～10日後に2回目の防除を行う。ただし、1回目の防除（出穂期の防除）が遅れることがないようにするなど状況に応じて対応する。

(2) 耕種的防除

ア 令和7年度も越冬成虫が畦畔や水田周辺のイネ科雑草に寄生していることが観察された。一部では成虫が畦畔のヒエ類等を餌にして産卵し、出穂前から幼虫が発生したほ場も確認された。しかし、他の斑点米カメムシ類と比較して生息する個体は少なく、雑草管理での高い密度抑制効果は実証されていない。ただし、他の斑点米カメムシ類に対しては有効であるので、栽培暦等にしながら雑草管理を従来どおり実施する。

イ 成虫は越冬場所へ移動する前の生息場所として、極早生や早生品種の稲刈り後の再生イネ<sup>注</sup>も利用する。稲刈り後の耕うんで再生イネを減らすことは、本種の越冬量削減につながると期待されるので、極早生や早生品種ほ場で翌年の春作業に支障のない場合は収穫後の耕うん等を検討する。

注) 再生イネ：稲刈り後の刈り株から再生して出穂したイネ

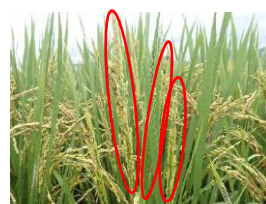
ウ 前述のとおり、本種の集中飛来リスクが高いほ場は、周辺より出穂が極端に早い、又は遅いほ場である。そのため、可能な限り出穂期が揃うよう同一品種の団地化を進めることが望ましい。



イネカメムシ成虫  
(体長 約 13mm)



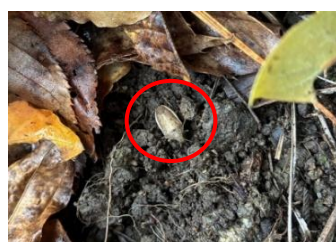
イネカメムシ幼虫



出穂期の吸汁による不稔



乳熟期以降の吸汁による基部斑点米



越冬場所  
(日当たりの良い斜面、赤丸内は越冬成虫)